



## 2020年の世界

アジア経済交流センター顧問 藤野 文悟

### 1. はじめに

(2019年の回顧)

2019を一言で表現すれば、人類の現代史の大きな曲り角、“乱”の幕明けの一年であったと筆者は考える。

#### 地勢学的に見れば

米・中の衝突、北朝鮮の核保有をめぐる動き、イランとイスラエルの対立に米国が介入している中東状況の混乱、欧州に於けるEUとBREXIT、更に自己中心的な右寄り勢力の抬頭、NATOの東進問題、ロシアと米国の対立、中南米の政治の混乱、各地で頻発するデモ等問題は枚挙にいとまがない。

#### 地球規模から見れば

地球温暖化による環境の悪化（各地に於ける自然災害の多発）は、人類の生存にかかわる。

#### 人類の秩序、価値観の観点より見れば

グローバリゼーションに対する懐疑、(国連、WTO等国際協力組織の機能不全、自由貿易に対する不信) ひいては数世紀にわたって人類の秩序を形成して来た民主主義、自由、人権という普遍的価値観が大きく揺らぎ始めている。特に20/21世紀の世界をリードして来た自由競争を基軸とする資本主義市場経済が、貧富の格差の拡大という荒波にもまれ進路を見失いつつある様に見える。貧富の格差の拡大は人類の共同体的生活の全てに甚大な影響を及ぼす。

この様に見てくると2019年はまさに繁栄を謳歌した筈の人類が逢着した矛盾と問題点が一挙に表面化した年であり、まさに“乱”の開

幕の年であったと位置付けられよう。そしてその火つけ役となったのは外ならぬ世界秩序の維持を担って来た筈の米国であり、その大統領であるのは何かを暗示している様だ。

### 2. 2020年に世界はどう動くか

2019年の世界を“乱”の開幕と見るならば2020年は幕が上がったばかりであり、まだ先は見えない。それでも一応米中摩擦を中心にいくつかの課題に就いて問題点を検討して見よう。

#### 米中関係

現在世界最大の関心事の一つは米国と中国の角逐の行方にある。米ソの冷戦終息後の新たな冷戦とも言えるがその内容は複雑で多岐にわたる。貿易上の摩擦は2019年末取敢えず第一段階の合意に達したが、今後どうなるか。アメリカ側の事情は不明としか言い様がない。トランプ大統領の再選の見通し如何である。再選が難しいと判断すれば中国との闘争が激しくなり、中国からより多くの譲歩を引出そうとするだろう。米中摩擦は大統領にとってはあくまで再選とのデールである。ワシントンが今、中国との覇権闘争全体に変化しつつあるなかで、大統領の出方は全く不分明である。

中国は基本的にアメリカと争う積りはない。お互いにWIN・WINの関係を享受してきたのである。本質論から言えば、アメリカは中国の急速な発展が世界のなかの自国の一局中心体制に対する深刻な脅威となって来たと考

え始めている。これは現在アメリカ政界全体を覆っている雰囲気である。この点では共和党も民主党も一致している。(トランプ大統領が単なる経済問題と考えているのとは対照的である。) これまではエンゲージメント政策で中国が発展すればやがて、アメリカの価値観に近付き協調が可能と考えたが、習近平政権の中国の動きは、中国独自の路線を強く打出して居り、このままでは包摂政策は無理で、デカプリング路線に転向しようとしている。中国は国家が第一の資本主義市場経済路線をつらぬき、一帯一路政策を通じてグローバル化の推進、多様な価値観の共存、人類運命共同体論を展開しているのである。

中国はアメリカとの対応に就いて、当面どの様に考えているのだろうか。以下は筆者の予測である。

- ①当面の総合的国力を考えれば中国がアメリカを凌駕出来る段階に到達するには尚かなりの時間がかかる。今この点でアメリカと対決することは考えていない。(経済力はある程度上昇しているが、軍事力、文化力(ソフトパワー)等の総合的国力では明らかに劣勢である。)
- ②トランプ政権の貿易に関する要求はある程度は受け入れる。国家のあり方では譲歩は出来ないが中国が今後改革を進めて行く上で必要と考えられる部分もある。(知財権等) 一定程度譲歩することは可能。
- ③中国と同様アメリカにも究極のところ損失が大きい。我慢比べになれば中国は耐えられる。従って臥薪嘗胆の持久戦で行く。  
この様な考え方のもとで第一段階の合意(トランプ発言)で一定程度の譲歩を行った。(農産物の輸入拡大と知財権の保護等)。ト

ランプ政権が変わると変わるまいと米中の闘いは今後の世界状況を左右する長い闘いとなるだろう。

### 今後の中国の課題は何か

国家全体の経済力は近い将来アメリカに追いつくだろう。しかし軍事力、そして文化力(ソフトパワー)の面ではどうか。軍事力はお互いをたたける力を持てば充分であり、更に拡張することは外交力を強化する手段と言う以外にあまり意味はない。問題はソフトパワーである。欧米の文化力は全人類の発展に多大な影響を与えて来た。その価値観—自由主義、民主主義、人権、法の支配—は基本理念として、世界の秩序を支えて来たと言っても過言ではない。中国の抬頭はそのソフトパワーに変化の兆しを見せ始めた。習近平氏の一带一路、全人類運命共同体、国家中心の資本主義市場経済、異なる価値観の共存、反覇権、グローバル化、をどの様に世界が受け入れるかが問われている。トランプ氏の出現は長年にわたって世界をリードして来た欧米の価値観を大きく変えるものとなるだろう。習近平氏の政策が世界の大きい潮流となるか否か、基本的理念如何にかかっている。

### 欧州の動き

英国は結局EUから離脱するだろう。はたして英国の為になるかならないか、大きな疑問符がつきながら国民はその道を選択した。その先に何かあるのか。EUとのFTAが結ばれるのだろうか。簡単ではないとすれば、結局“合意なき離脱”となる可能性もある。そうなれば英国から数多くの外国企業が離れて行くことになるかも知れない。英国の繁栄は終焉を迎えるかも知れないとの危惧から逃れられない。

ドイツの経済も低迷を始め、政局は混乱に向かっている。フランスもデモが多発し、盤石ではない。更に問題なのはトランプ氏に触発された様な極右勢力の拡大である。独仏がゆらげば、EUそのものの存在がむつかしくなる。

## 中東の動き

トランプ氏の徹底したイスラエル擁護、イラン敵視政策によりイランとの関係は一触即発の危機的状況にある。思いもかけないアメリカによるイラン司令官殺害事件はアメリカ・イランの戦争の危機すら予測させている。

## ロシアの動き

ロシアとアメリカの関係は泥沼に陥りつつある。中国とロシアは益々協調する動きにある。中ロ対アメリカの構図となれば、新たな冷戦構造が出来あがる。

## 北東アジアの動き

トランプ氏の歩み寄りがなければ、金正恩氏は非核化より全面的に後退するだろう。北朝鮮の動き次第で、イランに続く危機が北東アジアで起る。トランプ政権は果たして耐えることが出来るだろうか。中南米、香港、台湾状況もトランプ政権にとって外すことの出来ない外交課題である。

## 3. おわりに

当面の世界状況の底流に二つの大きな問題がある。一つは地球環境問題であり、一つは世界の秩序をどの様に再構築するか、民主主義のあり方の問題である。

### ①環境問題

表面に発生している問題すべてを包摂する問題として地球の温暖化がある。このままCO<sup>2</sup>の排出を容認すればやがて人類の生存

をゆるがす事態となる。表面的な紛争を乗り越えて人類が結束出来るか、2020年は問われねばならない。

### ②世界の秩序と民主主義の行方

自己中心主義、デモの多発、右派勢力の抬頭等、アメリカ一局を中心とする世界の秩序が崩れ始めた。自由と資本主義、民主主義がその存在の可否を問われ始めている。民主主義にかわる新しいイズムはあるのか。個人と自由と国家の関係は如何にあるべきか、新しい秩序の問われ始めた一年となるだろう。

(2020年1月6日記)